

江南村内遺跡群Ⅰ

昭和58年度発掘調査概要

1984

埼玉県大里郡江南村教育委員会

目 次

序

I はじめに	1
II 本田・東台遺跡の調査	2
1. 第 8 号住居跡	4
2. 第 13 号住居跡	5
3. 第 19 号住居跡	7
III 塩西遺跡の調査	11
1. 第 2 号跡	12
2. 方形周溝墓	16
IV 本田・東台遺跡について	18
V 塩西遺跡について	19

序

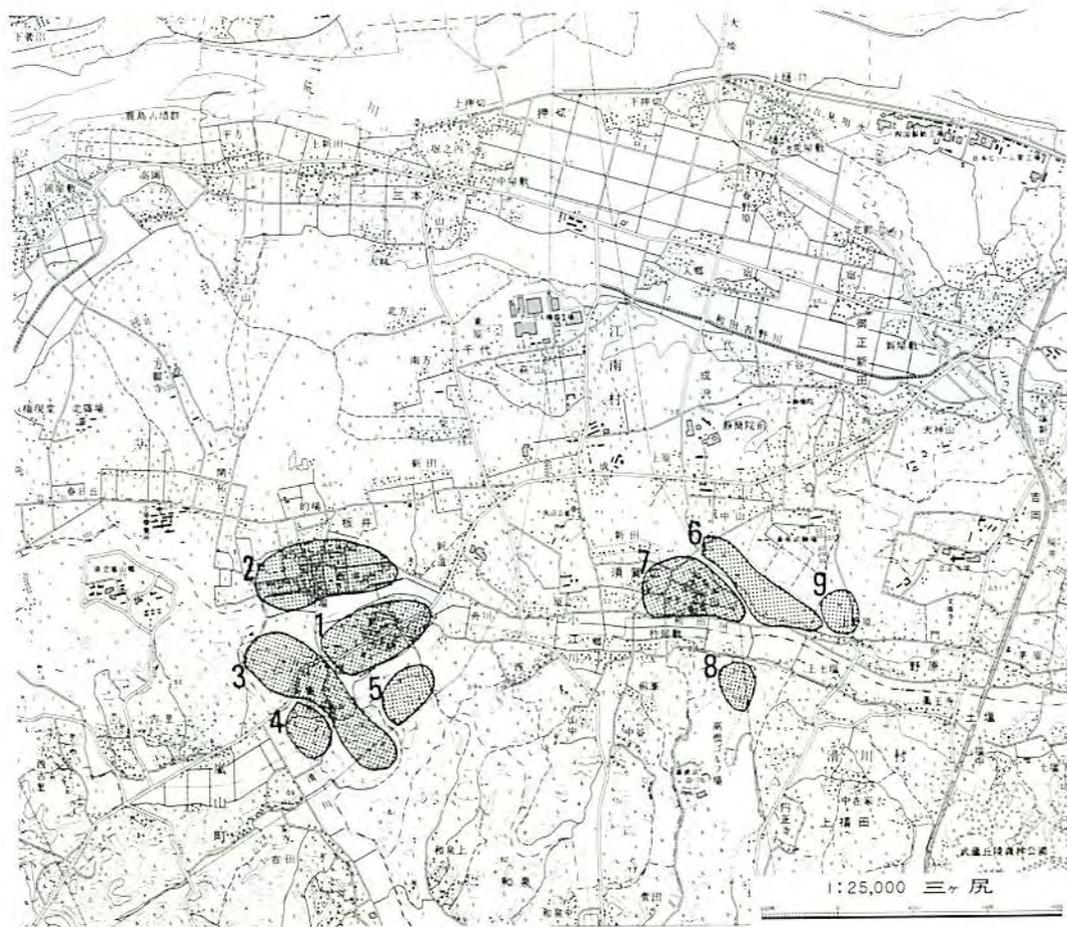
緑と清流の自然環境に恵まれた江南村は、いにしえより人々の生活に適した場所であったようです。村の北部に当る沖積底地に広がる水田地帯、なだらかな、所々に湧水を発する洪積台地や丘陵地には、祖先の生活を示す多くの遺跡が埋れています。この遺跡の中には縄文時代の集落跡をはじめ塩古墳群や戦国時代の城跡など、長い時代に亘って、いろいろな種類があることがわかっています。

このたび農業振興事業として、農村総合整備モデル事業、連絡農道整備事業などが5年の予定で実施されるに当たり、工事によって失われる遺跡を調査、記録するため発掘を行いました。本田、東台遺跡では古墳時代の集落が現われ、塩西遺跡では江南村では初めての先土器時代の遺物が発見されました。これらの遺物は郷土の先人の貴重な遺産として永久に保存し、社会教育のため活用してまいりたいと存じます。

最後になりましたが、調査にご協力をいただいた地元の方々、立正大学生には心から感謝申し上げます。

昭和59年3月

埼玉県大里郡江南村教育委員会
教育長 小 島 孫 一



第1図 地形と周辺の遺跡群

はじめに

江南村は、荒川の右岸に位置し、地形的には荒川による沖積底地と洪積台地、丘陵地からなり、そのほとんどは「江南台地」で占められている。この台地上には、濃密に遺跡が分布しており、160ヶ所以上が確認される。しかし山林におおわれている地域までも遺跡の所在を確認するには至っておらず、なお多くの遺跡が埋れていることが予想される。

現在、江南地域では、都市計画による土地区画整理、農業構造改善を旨とする各種事業が計画、実施され、また一方で民間による大小規模の開発も増加の傾向を見せている。江南村ではこのような諸事業の実施に先立ち、埋蔵文化財の記録保存を徹底すると共に、遺跡の所在についても鋭意確認を行っている。

今回の村内遺跡群調査は、先の事業の終了する昭和62年までの5ヶ年を予定しており、本年はその初年度に当たっている。調査地は地図上では、7の本田東台遺跡と1の塩西遺跡である。周辺には、6-野原古墳群、8-円正寺古墳群、9-宮脇遺跡などや、2-板井・氷川遺跡（岩比田地点調査済）、3-塩古墳群、4-塩前遺跡、5-塩・丸山遺跡など同時代の集落跡や古墳等の遺跡が近接して群在し、独自の考古学的環境をつくり出している。



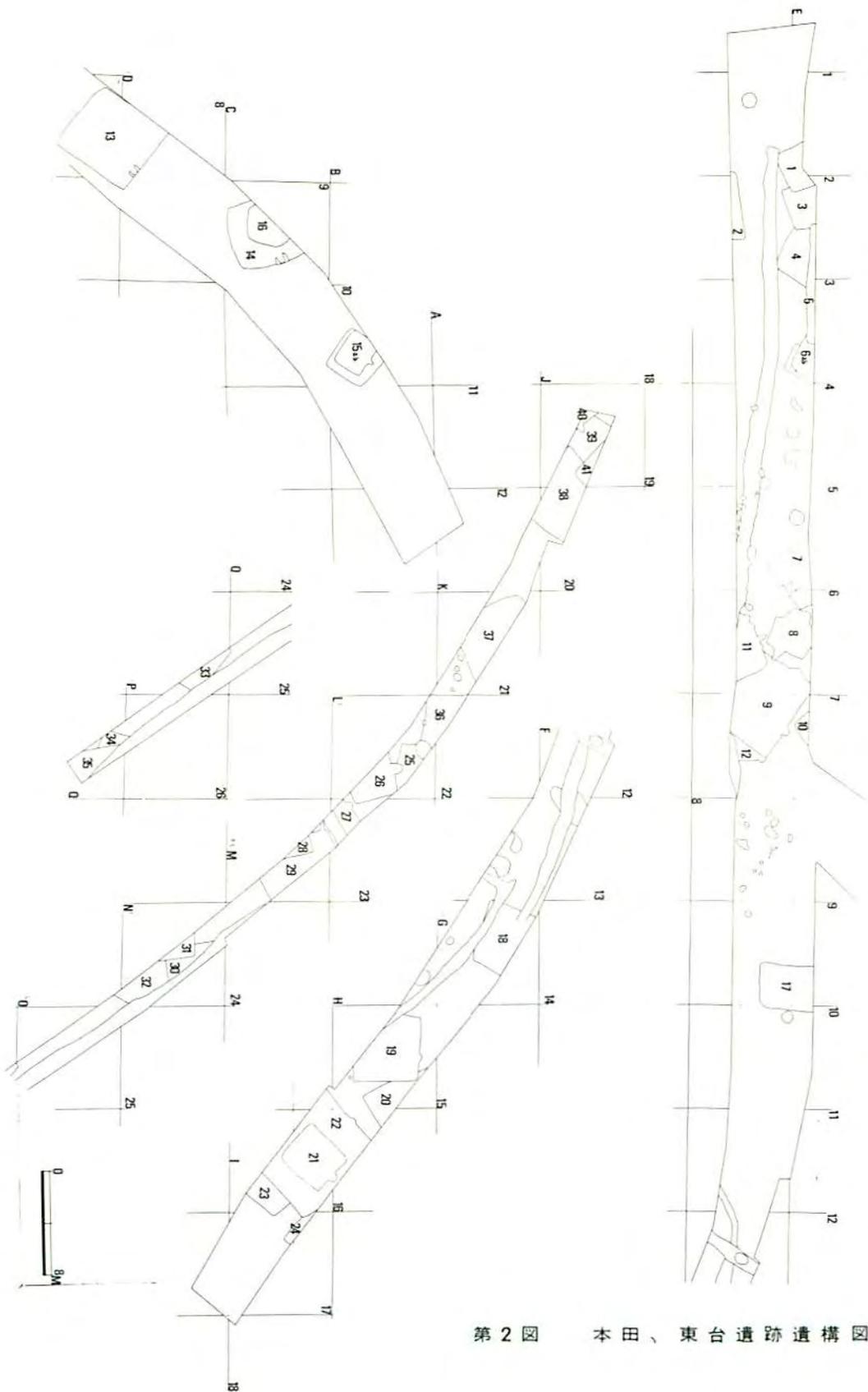
本田・東台遺跡の調査

本田・東台遺跡は、比企丘陵の北縁と和田川をはさんで接し合う江南台地の南端に位置している。東側は、現在谷津田となっている細長い開析谷によって台地が削り取られ、対岸の野原古墳群と向き合っている。この谷は江南台地の中央付近まで、幅80～90m、長さ1.4km程入り込んでおり途中2つの溜池が設けられている。西側は釈迦寺、八幡神社の北側へ入る浅い谷があり、遺跡の西限に当たると思われるが、八幡神社西側にも遺物の散布が見られ本遺跡と区別できるかもしれない。北西から北側は、平坦な地形が谷の奥部まで畑地、山林となって続いているため遺跡の範囲を定めるのが困難であるが、谷の中間に位置する伝兵衛沼の付近まで遺物の散布が見られ、一応この広さが遺跡の範囲と考えられるだろう。

調査地点は遺跡の南東側で、既存の農道部分と拡幅部分を対象とした。長さは約350m程である。現状はすべて畑地で桑・麦・野菜等が複雑な地割の土地に耕作されている。調査は表土除去に重機を使用した。明らかに旧地形を削り取っている部分は調査進行上除いた。調査の全体を通じて遺構を覆う表土、遺構中のフク土が浅く、深部に及ぶカク乱、削平が顕著にみられた。住居跡の中には床面しか検出されなかった例もある。検出された遺構のほとんどは、互いに重なり合っており土地の利用はきわめて高いようである。遺構の概要は次のとおりである。

古墳時代の堅穴住居跡	42軒
時代不詳の堅穴住居跡	1軒
" の掘立柱建物	1棟
" 溝	8条
火葬跡	2基
土壇	18基

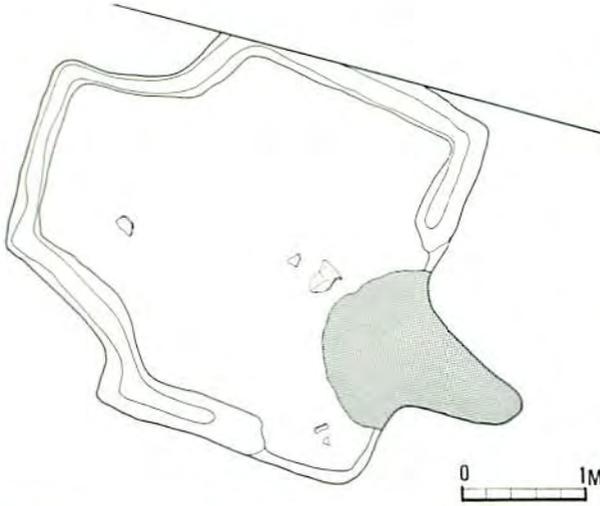
時代不詳の遺構を除いて、古墳時代の住居跡が主で、調査区の全域より検出された。またこれらの住居跡からは、古墳時代中～後半の土師器、須恵器等の遺物が多量に出土している。以下、保存例の良好な遺構を取り上げ概述したい。 (新井)



第2圖 木田、東台遺跡遺構圖

第 8 号住居跡

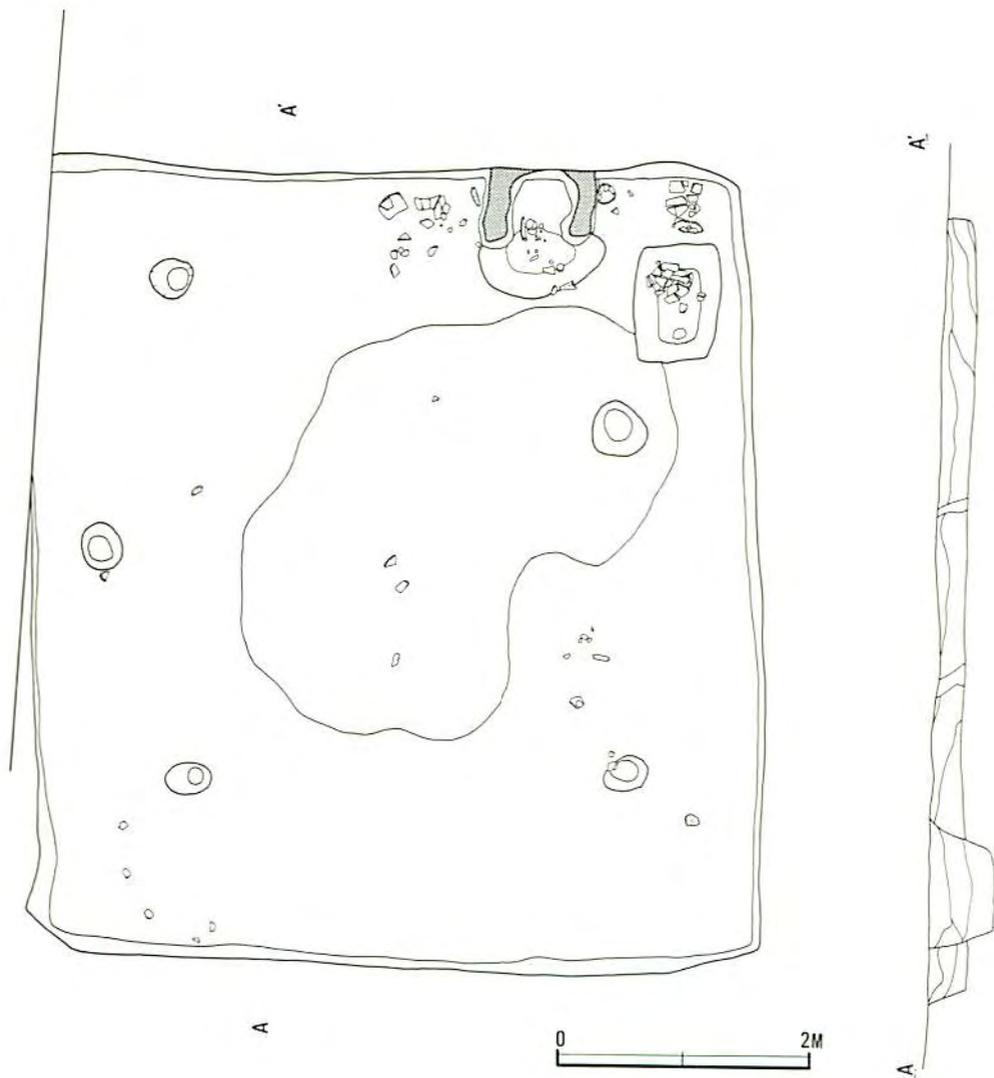
本住居跡はE6区内に位置し、北壁が調査範囲外にかかる。第9号住居跡と重複しており本跡が新しい。他にカク乱等は少く保存状態は良好であった。平面形態はカマドの反対側、西壁部分に張り出し部分を持つ凸形を呈しており、床、周溝とも同様の形態をしている。規模は東壁3.15m、南壁は張り出し部分を除くと2.25mを測る。張り出し部分では幅1.65m、奥行1.15mを測る。各辺とも直線的に伸び、張り出し部分は内湾するゆるやかなカーブを描いている。壁高は45~48cm



第 3 図 第 8 号住居跡

と他の住居壁より深い掘り込みをしている。床面はローム土の平坦な直床で堅く踏み固められている。柱穴は精査したが確認されなかった。周溝はカマドと南東を除いて全周する。幅は15~24cm、深さ8~10cmを測り、断面はU字型をしている。主軸方向はN-172°-Eを示す。住居の覆土は16層に分けられ自然堆積を示している。カマドは東壁の中央よりやや右側に位置している。壁の掘り込みはしっかりしており、遺存状態は良好であった。各壁とも70°~垂直に近い立ち上りをしている。出土遺物は少量で破片のみであった。カマドは全長1.3mで、掘り込みが深いためか煙道部は良好に遺存していた。燃焼部は楕円形で壁外に半分以上延びている。火床は地山との間に黄褐色土層の間層がある。煙道部へはなだらかな段を持って移行している。袖は右側に地山を削出した遺存部分がわずかに残り、左側には暗褐色粘土を貼り付けた部分が遺存していた。火床面より土師器片が出土している。(内間 靖)

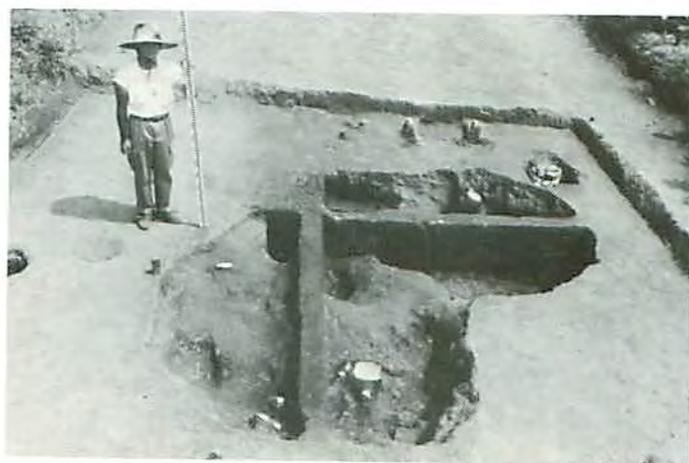




第4図 第13号住居跡

写真、第13号住居跡

床下土壇

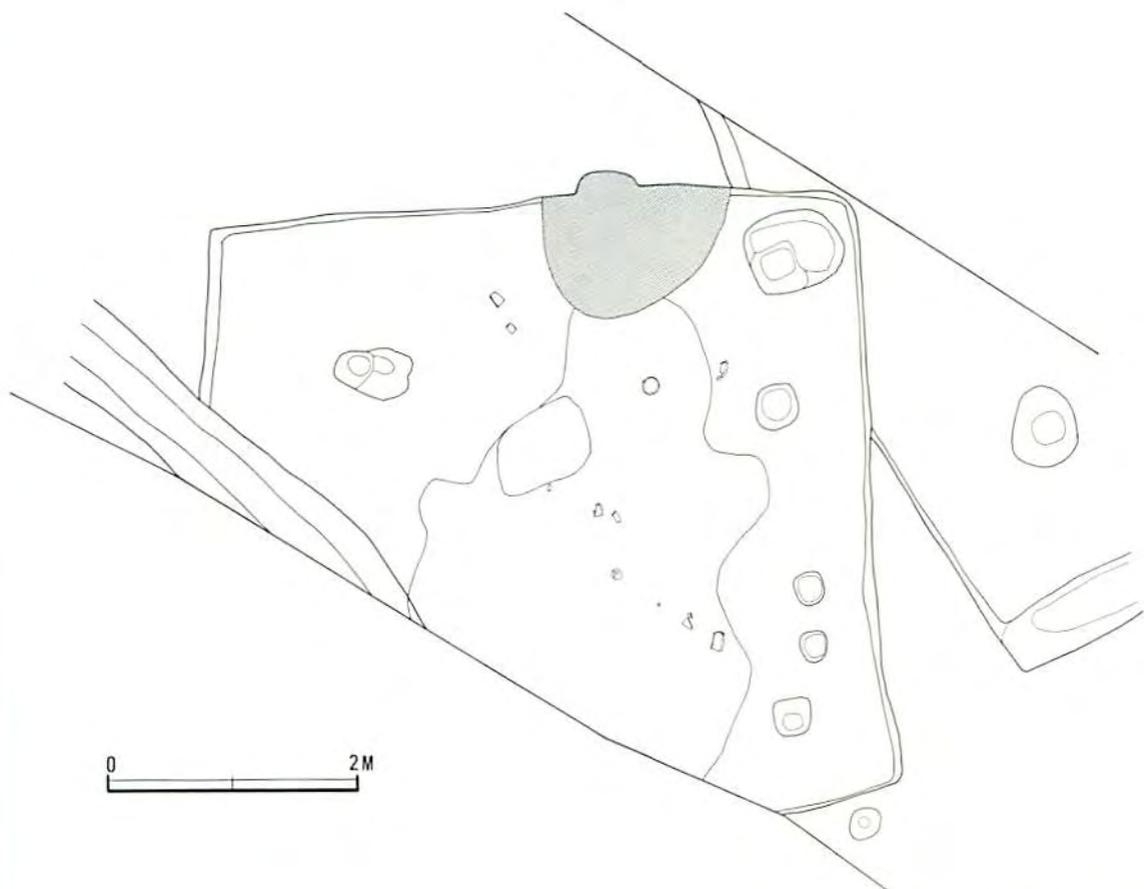


第13号住居跡

C8区に位置する。北西隅が一部区外に延びる他、ほぼ全体を検出することができた。覆土はやや浅く深部までカク乱が及んでいた。平面形態は南西隅がやや隅丸を呈するが他の隅部は矩形で、ほぼ正方形を呈している。主軸方向はN-42°-Eを示す。各壁は直線的で、北壁は5.55m、東壁6.30m、南壁4.56m、西壁は3.57m遺存している。壁高は北壁、西壁で18cm、東壁24cm、南壁17cmを測る。カマドは北壁の右寄に構築され、煙道部は検出されていない。床面は土壌部分を除いて地山面を平坦に踏み堅めており、住居中央部分へかけて低くなっていた。この部分には貼り床が明瞭であった。平面形態は不整楕円形を呈し、一部貼り床をされた床下土壌であった。周溝は検出されていない。柱穴は主柱穴4本が四隅に正しく配されるが西壁中央付近に位置する柱穴も主柱となるかもしれない。貯蔵穴はカマド右側、焚口から斜右方向に1m程離れている。長方形を呈し、98×68cmを測る。内部には坏、甌、甕片が検出された。住居内の遺物はカマド周辺に集中して出土しており、使用状態と思われる例もある。カマド右袖の外側では北壁に寄りかけるような状態で甌を乗せた甕が出土している。

カマドは燃焼部が壁外に張り出さず煙道への移行はゆるやかである。規模は55×50cmを測り、内部は側面、地山面の火床とも強く焼土化している。燃焼部、火床面より出土した土器は長甕3個体分で、天井、袖部に封入して用いたと思われる。両袖は暗褐色土によって構築されている。焚口部は1.0×0.3mを測る。床下土壌は大きな2個の土壌が切り合い、内部はさらに複雑な形態をしており、数次の掘削が考えられる。土師器細片もフク土中に混入している。(新島喜久雄)





第 5 図 第 19 号 住 居 跡

第 19 号住居跡

本住居跡はG 14 区内に位置する。南西隅部分が調査区外に延びるが全体の規模は推定できる。本住居跡は第 20 号住居跡と 4 号溝と重複するが、新旧関係は第 20 号住居跡→19 号住居跡→4 号溝と新しくなっている。平面形態は、ほぼ正方形を呈すると思われ、現存長では、北壁 5.16 m、

右側 写真

第 19 号住居跡カマド

袖部には甕を

右 1、左 3 個封入している





東壁 4.80 m、西壁 1.20 m を測る。主軸方向は、N-5°-E を示す。表土より深部まで削平が及んでいるため、壁の遺存状態は不良で各壁高は、およそ 5~8 cm 程しかない状態であった。カマドは北壁中央より右隅寄りに位置している。右横には貯蔵穴がある。床面は地山を踏み堅めた直床となっているが、床中央部は白色粘土などで貼床されており、直下には複雑に土壌が重複している。柱穴は主柱穴 3 本と東壁に接近して 1 対の小穴がある。出入口部に当るものか。

カマドは、燃焼部分だけが遺存していた。煙道は削平されたと思われる。燃焼部はやや壁外に張り出し、土器を据えた掛け口部分はほぼ住居壁の延長上に位置するようである。火床は良く焼けている。両袖部分は、右袖、長さ 80 cm で袖端部に甕を倒立して封入している。左袖は長さ 75 cm で倒立した甕を 3 個封入している。これらは削平が深いため口縁部しか残っていなかったが、カマドの構築方法を知る重要な資料となろう。焚口周辺には焼土・炭化物の散布が多量に見られた。貯蔵穴は長方形を呈し、80×60 cm を測る。内部は南西隅が一段掘り下げられている。床下土壌は住居中央に位置し、カマド焚口は床下土壌の貼床上にある。ロームブロック、焼土層・暗褐色土を主として 16 層を認めることができるが、層位は人為的な埋没を呈している。土器片も出土しているため床面上の土器と比較検討しなければならないだろう。

床面上から出土した土器には土師器甕、甗、坏、埴の他、須恵器坏身、鉄鉢が出土している。須恵器は身合蓋は検出されていない。鉄鉢はカマド右側の甗フク土中より検出された。なお、鉄鉢を出土した住居跡は本住居跡と第 21 号住居跡の 2 例しかないが、鉄鉢の型式は異っている。

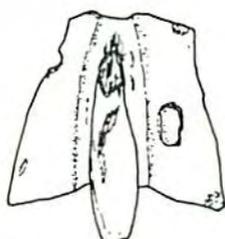
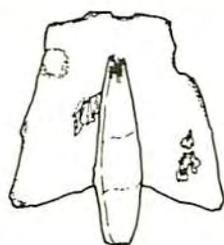
本住居の時期は 6 世紀後半~7 世紀初頭に当たると考えられる。

(伊藤公成)



鉄鏃

無茎で腸括の入った三角形を呈する鉄鏃である。先端部を欠失している他遺存状態は良好である。茎の部分は木質で腐朽せず遺存していた。樹種は不明だが長さ2.5cm、最大径0.6cmで、鏃をソケット状にはさみ込むように取り付けられている。

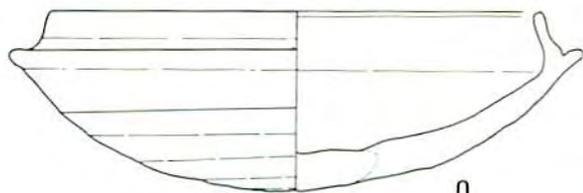


第6図 第19号住居跡出土鉄鏃



須恵器 坏身

住居中央付近の床よりやや浮き上り内面を上に向けた状態で出土している。坏身の完形品である。器高4.8cm、口径13.1cm、受部径15.2cmを測る。胎土は砂、小石、白色繊維状物質を含む、焼成は良好で青灰色を呈すが、体部外面に剥落、亀裂が観察される。剥落面には植物繊維様の圧痕が認められる。内底面には打具の圧痕が不十分なナデのため磨消されずに残っている。本器に見合う蓋は検出されなかった。6世紀第3四半世紀に相当すると思われる。



第7図 第19号住居跡出土須恵器



第1号溝

本溝はE2～E6区内に位置しほぼ直線的に東方向に延び検出長は約40m、幅は平均1.2m程で最大幅1.5m、最小幅0.9mを測る。断面形態は箱矢研型を呈し、E5区内では南側の上面に柱穴が検出されている。溝底部の傾きは東方へ向けて下り傾斜になっている。出土遺物は土師細片の他ほとんど検出されなかった本溝は古墳時代の住居群を切って構築され平安時代までに埋没を完了している。

写真はE6付近より西側を向いて撮影したものである。

(新島喜久雄)

本田、東台遺跡調査風景

E6付近

83年7月29日撮影



塩西遺跡の調査

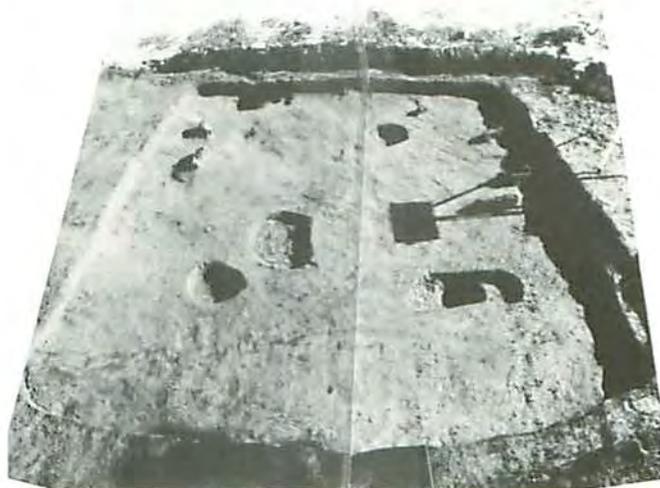
塩西遺跡は比企丘陵の北縁に位置する開析の進んだ一支丘上に位置している。和田川を隔てて出雲伊波比神社の立地する江南台地板井地区と向き合っている。南側は正木の谷に開析され丸山、諸ヶ谷、明賀の丘陵と尾根を接する部分まで谷頭がのびる。遺跡の立地する丘陵は東北向きに傾斜する半島状をしている。遺跡の範囲は丘陵頂部付近の塩八幡神社付近よりこの緩斜面上の全域に亘っている。一部塩古墳群の荒井支群に重る部分もある。周辺は塩古墳群の各支群、塩館跡、塩前、塩丸山、正木谷等の集落、古墳が濃密に群在しており考古学的環境を作り出している。

現状は畑地と山林が主体を占めるが宅地、小川一熊谷県道が貫通しているなど環境の変化が徐々に進んでいる。調査地点は本遺跡の中央を東西に通る農道の拡幅改良部分、約400mを対象とした。表土の除去には重機を使用した。一部切通し等で旧地形を大きく削平する部分は対象より除いた。

検出された遺構は次のとおりである。

- | | |
|------------|-----|
| ・方形周溝墓 | 3基 |
| ・古墳時代堅穴住居跡 | 2軒 |
| ・溝 | 1条 |
| ・土城 | 2基 |
| ・石器集中跡 | 1ヶ所 |
| ・埋没谷 | |

江南地域では初見の方形周溝墓、先土器ブロックもあり貴重な発見があった。遺構、遺物の年代も先土器時代の石器類と古墳時代初頭の土器群が主体を占めるが、他に縄文～平安までの遺物もわずかではあるが検出されている。先土器時代遺物の出土層位に関して概述すると、第1層は表土の暗褐色土層からなり、第2層は黄褐色の軟質ロームである。3層は黄褐色の硬質ローム層で厚さは30cmほどである。4層は暗茶褐色土層で粘性が強い。5層は灰白色粘土層となる。この層位は同一丘陵の塩前遺跡で調査した層位の結果と同一であり、さらに江南台地域のローム層とほぼ同一の層位をも示している。江南台地では3層は立川ローム層に、4層は武蔵野

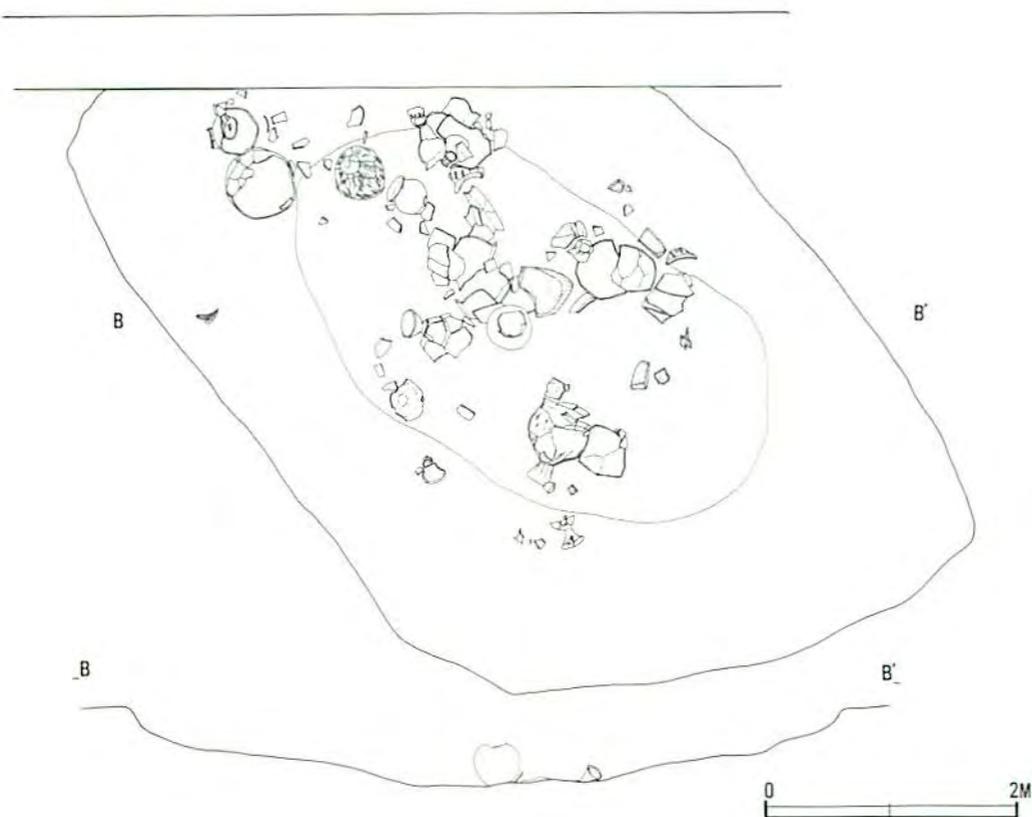


塩・丸山遺跡 1号住居跡

ローム層に、5層は下未吉ローム層に比定されと考えられている。本遺跡の石器群はほとんど第3層の上位から出土しているので立川ローム層上層の出土石器群と位置づけられよう。

その他本遺跡に関しては、調査区の北側、東西方向に十三の塚があったといわれるが関係するような遺構は検出できなかった。

(新井)



第8図 2号跡

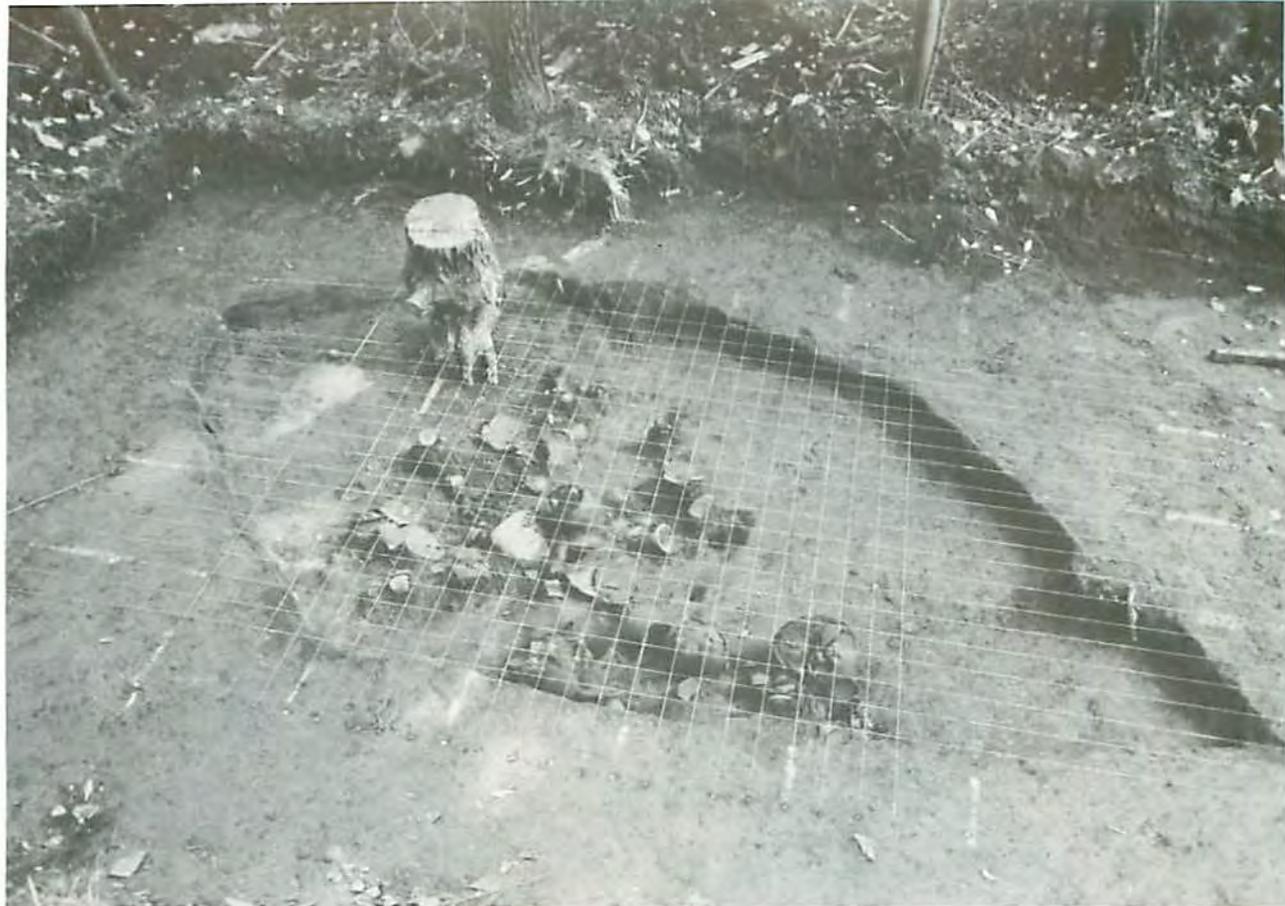
第2号跡

本遺構はF15区内に位置し、本遺跡の所在する西端、丘陵の頂部付近に当る。塩古墳群の荒井支群とも重なり、本跡より12m北西部分には田墳が存在していた。表土下20～25cmで確認され調査区内に全体を検出することができた。

平面形態は3.50×2.10mの長楕円形を呈している。北側は水道管敷設により破壊されているが、このカク乱部分より遺構は延びていないため、遺構の北縁がカク乱により幅50cmこわされただけであることがわかる。なお、カク乱土中からも本跡に伴うと思われる遺物が出土している。他にカク乱部分は無く遺存状態は良好であった。遺構の主軸はN-84°-Wを示している。

覆土は2層に分けることができ、自然堆積を示している。表土中から検出された遺物を除いて、ほとんどの遺物は第1層黒色土中から検出された。第2層は暗褐色土で全く遺物を含まない。遺物の遺存は第2層堆積後である。遺物と第1層を除去すると第2層の堆積状況が現われるが、中央部分へ緩やかに傾斜する浅い舟底状を呈している。ここを遺物の遺存された底面としておく。2層を除去するとほぼ垂直に掘り込んだ平坦な底部を持つ掘形が現われる。

遺物は遺構の主軸に測って2.20×1.30mの範囲に集中して出土している。集中部の中央部には20～25cm大の破砕された焼礫が据え置かれ、周囲に土器が倒れ込むような状況と、据え置かれた状況を示す2つの状況が観察された。複数の土器の主軸は遺構底面を向いている。また数例は土器を倒立して据え置いたままの状態を検出されている。このような差は土器の遺存状況にも見うけられ、保存状況の良好な例と投棄され、土器片が散乱する例がある。



また遺物の出土高度には底面に接した遺物と、5～8cm底面より浮いた状態の遺物の2者が観察される。これらは先の出土状況と組み合わせると2様の出土状態に分けることができよう。これら2様の出土状況を示す土器は完存する個体が多いが、一部分しか検出されなかった例もかなりある。現在整理中のため増減も予想されるが、土器の個体数は先のような小破片で遺存する土器まで含めると40個を数え、器種は単口緑台付甕-17、S字口緑台付甕-3、壺-4、有段口緑壺-2、小形甕-6、手捏土器-1、小型器台-4、埴-3、鉢-1、等がある。また70%以上遺存していた土器の個体数は19個で、器種は単口緑台付甕-7、壺型土器-2、有段口緑壺-1、小型器台-3、小型甕-2、埴型土器-2、手捏土器-1、である。これらの土器の中にはカゴ目の圧痕のある整美な埴型土器もある。なお土器と焼礫の他本跡からは他の遺物は全く検出されなかった。

本跡の性格を考える時、遺物の出土状況、器種の組成から、何らかの祭祀的な所産と考えることもできるかもしれないが、現在の段階では一つの視点として、今後正式報告までに、個々の土器についての分析を踏まえた上でさらに検討したい。特に個々の土器については在地の土器、他地域の系統を引くと思われる土器が共存するなどして、古墳時代初頭の土器組成の様相を良く表わしている。

次ページには接合・復元の済んだ土器を掲げた。No.3は肩部に網目状燃糸文を施す。高さ34.1cm。No.8、No.9は小型器台だが脚部には穿孔を施さない。No.8は10.8cm、No.9は8.6cmの高さを測る。No.13は竹状素材でありあげたカゴ目文様を全体に圧痕として残す埴である。口径16.2cm、器高6.6cmを測る。

(新井)



№ 1



№ 2



№ 3



№ 4



№ 5



№ 6



No. 7



No. 8



No. 9



No. 10



No. 11



No. 13



No. 12



第 2 号 跡 出 土 一 括 土 器

方形周溝墓

A 4～A 2区内に検出された。東西方向に連続する3基で構成され北半は区域外に延びている。

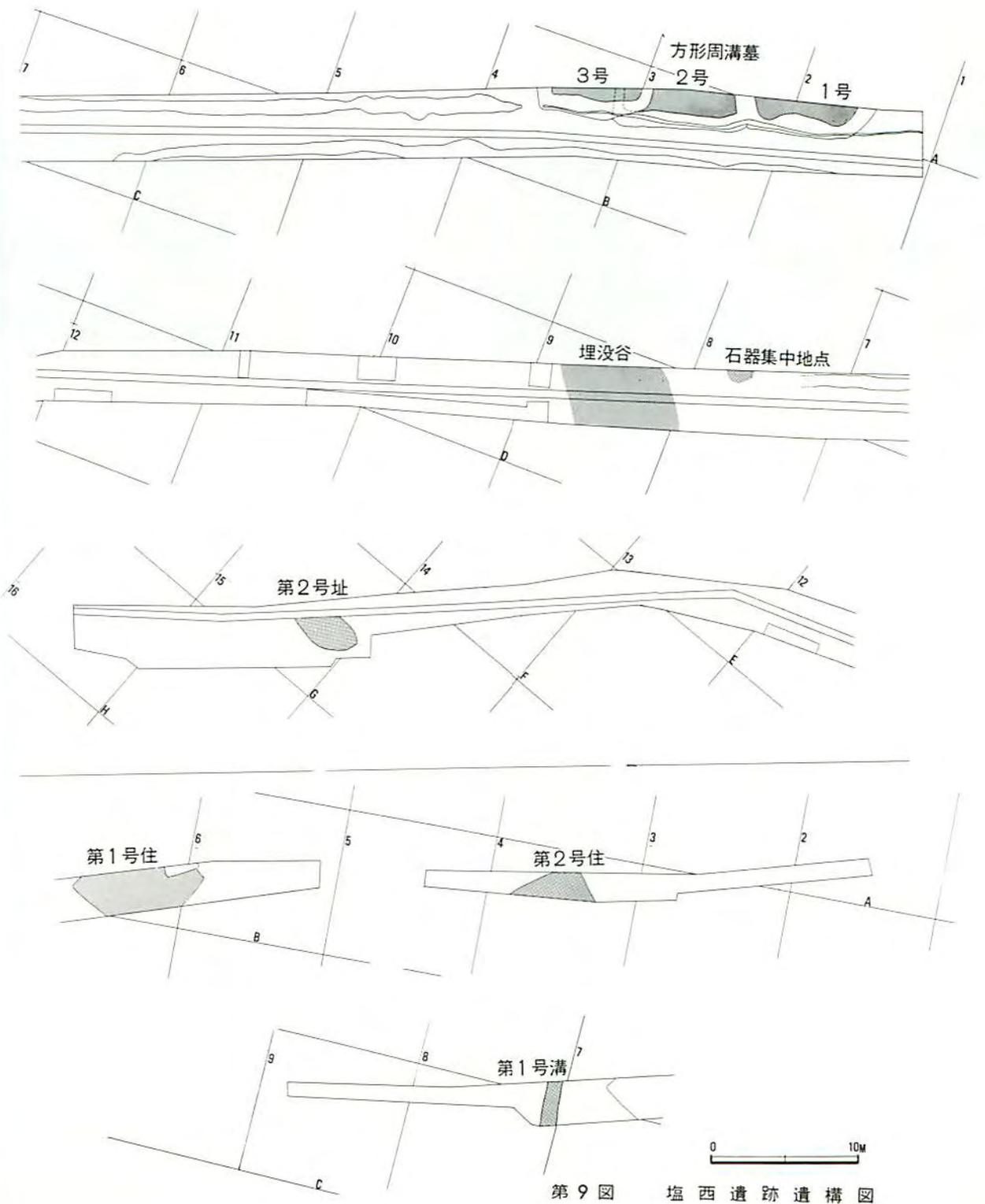
表土は浅く、カク乱が深く及んでいるため遺存状況はあまり良くない。南側の周溝部分には現道に沿って掘られた測溝に掘削されている。遺構の占める位置は、丘陵頂部の八幡神社付近より続くなだらかに緩斜する斜面がこの位置で下位の斜面へさらに傾斜する変換点に位置している。東側から1号、2号、3号とした。写真は東側より見たものである。1号は南西側に不整形な部分があり、形態上疑問が残る。2号、3号は方形の形態をとると思われる。規模は1号8.4 m、2号5.8 m、3号5.4 mである。溝の幅は1号1.2 m、2号1.1 m、3号1.1 mと全体的に小規模である。遺物はきわめて少く、1、3号周溝底部よりハケ痕の施された甕片が検出されたに過ぎない。



旧石器時代石器集中地点

C 8区内に検出された。丘陵の頂部よりやや降った位置で、北西には、丘陵の北側に開折した谷の先端部の埋没した浅い谷に面している。この谷は縄文中期ころに埋没していたようである。出土層位は、本跡の第Ⅲ層中でただちに南関東の層位に当ることは江南台地のローム層が詳細に分析されていないので困難だが、およそ立川ローム層に当るのではないかと考えられる。石器は大小の刮片と石核を中心として約90点程検出された。資料の中には接合可能な例も多い。石材はすべて不純物のまじった頁岩を用いている。(新井)







本田・東台遺跡について

本遺跡は古墳時代中～後期に渡る集落跡であることが解明されたわけであるが、広大な遺跡範囲のわずかな一角についてであるので第1号溝等を考えると、古墳時代以降の集落が近接して存在することも充分予想される。周辺の遺跡との関係で特に隣接する野原古墳群に関しては、本遺跡の住居跡に第5号住や第9号住、第22号住のような他の住居群の規模を上まわる住居跡があり、集落内の有力者の存在を推定させ、また別の住居跡では第9号住居跡内に鍛冶遺構と思われる土壌から多量の炭化物、焼土、羽口、鉄さい等が検出された。また第19号住居跡、21号住居跡からは鉄鏝、須恵器が検出されている。これらの遺物は野原古墳群の出土遺物等の検討を必要とするが古墳造営者の集落と推定できるのではないかと考えられる。

遺構については、古墳時代の住居跡に特徴的に見うけられるが、50%以上床面の検出された住居の床面には例外なく貼床下に土壌が検出された。この土壌は不定形や円形を呈し個数も2～5個と床面積の大部分を占める例が9、13、19、21、39、の住居跡に見られる。いくつかの床下土壌には遺物が検出されており、住居跡出土土器と比較・検討したい。このような床下土壌は、同時代と思われる例に、江南村野原の宮脇遺跡第8号住居跡がある他、平安時代には、同じく野原の熊野、荒神脇、庚申塚、久保遺跡で検出されており、和田川左岸の野原、須賀広一帯では古墳～平安まで継続して設置されていたようである。今後他地方で検出された床下土壌と比較し遺構の性格を考えたい。

(新井)



塩西遺跡について

本遺跡は塩古墳群に近接しているため調査当初より、古墳群成立に関わる資料を得られると考えていたが、幸運にして多大の成果を得ることができた。調査の結果明らかになった遺構、遺物は、塩古墳群に関連する古墳時代以降の資料に恵まれた。

方形周溝墓は古墳時代初頭の造営になるものと推定され、第2号址も同時期であろう。最近、築造時期、性格に問題を投げかけられている塩古墳群第1支群を前方後方墳あるいは、前方後方形周溝墓と推定するに当たっても、さらにこの問題は古墳の発生に大きくかかわってくるだけに、これらの内容と概念規定が明確でない今、各地における土器の検討から造営時期を明確にしていく視点が重要となろう。方形周溝墓の発見は、塩古墳群第1支群の1、2号墳を前方後方形周溝墓と考えた場合、今回発見された方形周溝墓の系譜上に前方後方形周溝墓の墓制があることが予想されよう。

調査の東端で検出された住居跡2軒は和泉期に入る住居跡であり、2号住居跡からは多量の土器が検出された。前段階の土器も混入するため、周辺には方形周溝墓の造営者の住居跡も存在すると思われる。五領期の住居跡は塩丸山遺跡で確認されており、周辺地域での表採資料も含めて本期の資料が蓄積しつつある。

2号址より検出された土器群の中には、S字口縁台付甕を始め、網目状捺糸文の施文された壺型土器など系譜上も注意しなければならない資料が存在する。また第2号住居跡からは、畿内の土器の系譜を受継ぐと思われる甕も伴出しており本遺跡の様相を複雑にしている。

旧石器時代石器集中跡は江南村にとってはもちろんのこと、江南台地域では寄居町の数例に次いで数少ない発見であり、今後、層位的な把握を主に、当地域の研究を進めていかなければならないだろう。

(新井)



例 言

1. 本書は農村総合整備モデル事業・連絡農道整備事業に伴う昭和58年度事業施行分に係わる発掘調査の概要報告書である。
2. 本遺跡群の発掘調査は江南村教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助を受けて行った。
3. 遺跡の所在地と調査の期間は次のとおりである。

本田・東台遺跡 江南村大字須賀広
昭和58年7月1日～10月31日

塩西遺跡 江南村大字塩
昭和58年11月1日～12月10日

4. 調査の組織は次のとおりである。

調査主体者—江南村教育委員会教育長	小島孫一
事務局	〃 次長 高橋正
	〃 社会教育主事 岡田恒雄
	〃 横山舜一
	〃 鹿庭栄子
調査担当者	〃 新井端

5. 本書の執筆、写真撮影は新井端が中心となり、内間靖、伊藤公成の協力を得た。

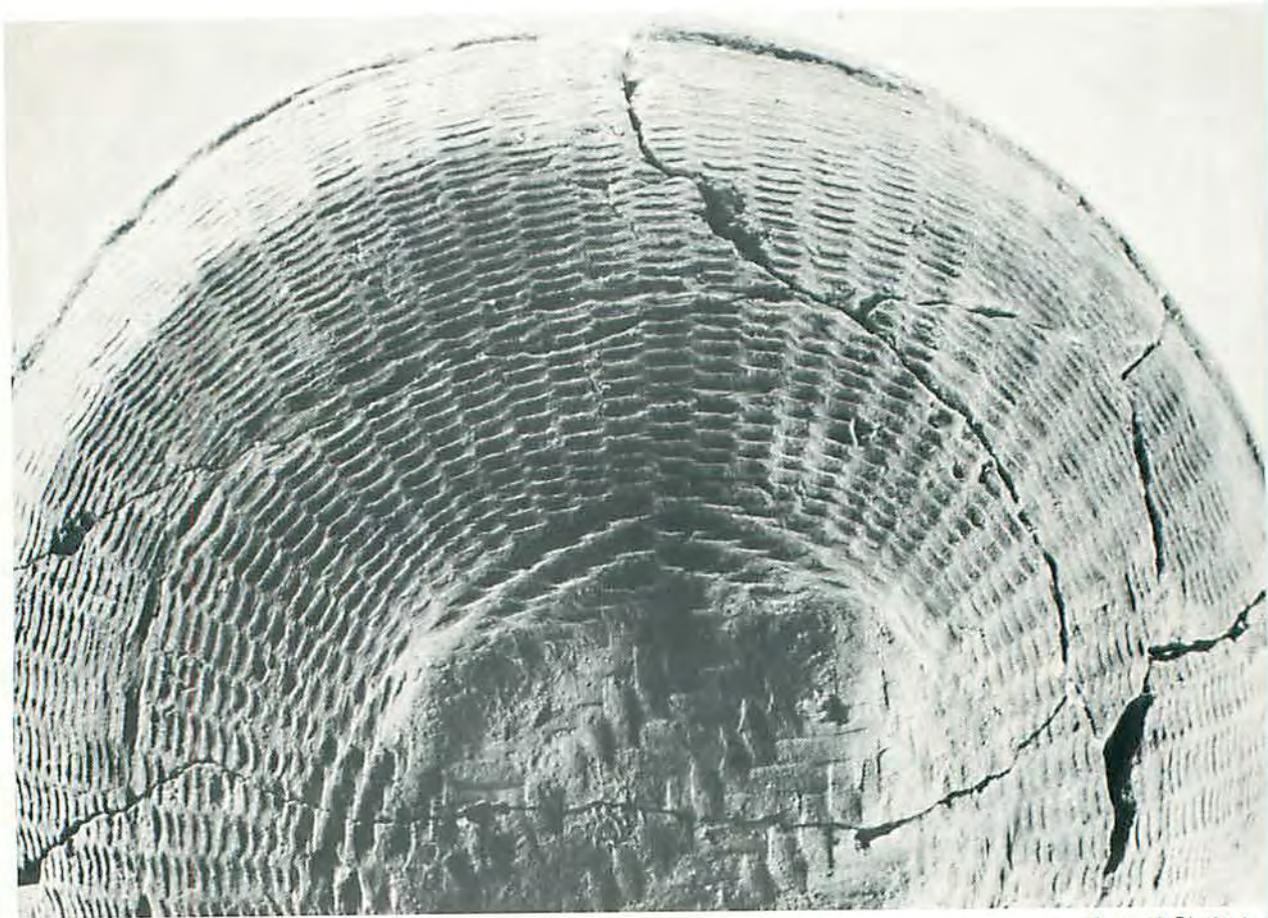
発掘調査参加者

本田・東台遺跡（上段）

高橋督治 吉田兼吉 吉田常子 田中やす
富岡和子 飯島義孝 富田 享 大森啓視
川田博幸 小林義信 橋本克之 吉井浩司
内山哲男 井上 進 大和田康明
吉田 隆 大久保聡彦 田辺 昇
（立正大学生）
新島喜久雄 伊藤公成 内間 靖
落合信政 岡田健男 大友隆之 亀井英泰
桐ヶ谷裕樹 佐々木伸一 高野浩之
多田英人 西 浩一 小山正夫

塩西遺跡（下段）

飯島義夫 飯島健介 飯島シノ 飯島きよ
飯島里子 飯島ひろ 内田シズ
宇治川ノブ子 宇治川サダ子 大沢玉江
小田川とめ 国田秀子 小林忠治
小林勝子 小林広子 篠場ナヲ 篠場廉子
鈴木てる 鈴木マキ 寺山八重子
利根田あい 利根田すい子 中島文恵
増田つる 山田しづ子 吉野君枝
吉野ちう
（立正大学生） 伊藤公成 西 浩一



塩西遺跡出土：